原著論文

動物看護学生と看護学生に対する補助犬の認知度調査

林 あずさ¹⁾、吉川 千絵²⁾、水越 美奈³⁾

1) 野村動物病院

2) イソダ犬猫病院

3) 日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科

A Survey on Awareness of Service Dogs among Veterinary Nursing and Nursing Students

Azusa Hayashi¹⁾, Chie Yoshikawa²⁾, Mina Mizukoshi³⁾

1) Nomura Animal Hospital

2) Isoda Dog & Cat Hospital

3) School of Veterinary Nursing & Technology, Faculty of Veterinary Science, Nippon Veterinary & Animal Science University

抄 録

身体障害者補助犬法では、不特定多数の人が利用する施設において補助犬同伴での利用を受け入れることが義務付けられている。しかし受け入れ拒否事例は今でも多く、医療機関もその例外ではない。今回、看護学生と動物看護学生の補助犬の認知度に着目し、どのような教育を実施すべきか明らかにすることを目的に看護学生104名と動物看護学生206名（大学生107名、専門学校生99名）に補助犬の認知度の比較調査を行った。動物看護学生は看護学生よりも補助犬の認知度は高く、さらに学校で補助犬に関する講義がある動物看護大学生の方が、講義のない専門学校生より理解が深かった。このことから、学校教育は、補助犬の理解をより深める効果があることが明らかになった。また、看護学生、動物看護学生共に補助犬の衛生管理や排泄管理に関することへの興味が低いことから、補助犬への関心を高めるような教育が必要だと考えられた。

キーワード：補助犬、身体障害者補助犬法、看護学生、動物看護学生

Abstract

In Japanese law concerning assistance dogs for the disabled, it is required to accept service dogs in public places and transportations. However, there are still many acceptance refusal cases, and various medical facilities are included. In this study, we conducted a survey on the awareness of medical and veterinary nursing students concerning service dogs. Three hundred and ten students (104 medical nursing students, 107 veterinary nursing college students, and 99 veterinary nursing vocational school students) answered the questionnaire. All veterinary college students took the classes about service dogs as an academic training, but these classes were not in the vocational school. The veterinary nursing students exceeded about the knowledge of service dogs than the medical nursing students. Further, veterinary nursing college students sufficiently understood service dogs than the vocational school students. That means, the lecture in formal education was effective for the understanding about service dogs. In addition, because all students have low interest about sanitation management and toilet support about service dogs, it is suggested that education raising awareness in these is necessary.

Keyword: service dogs, law concerning assistance dogs for the disabled, nursing student, veterinary nursing students

I. 序論

身体障害者補助犬（以下、補助犬）は、盲導犬・介助犬・聴導犬の3種類の犬の総称であり、身体障害者の生活の補助を行っている。身体障害者補助犬法（以下、補助犬法）は2002年5月に補助犬の育成や身体障害者の施設利用の円滑化を図り、身体障害者の自立と社会参加の促進を目的として成立した。補助犬法では、施設における補助犬の同伴、取り扱いについてなどが定められている。施設における補助犬の同伴については、国や地方公共団体、公共交通事業者、不特定多数の人が利用する施設の管理者は、施設に著しい損害が発生する恐れがある場合を除いて、補助犬の同伴を拒んではならないこと、補助犬を同伴して施設を利用する身体障害者は訓練を受けた犬であることを表示しなければならない。また補助犬の取り扱いについては、訓練事業者と身体障害者が補助犬の体を清潔に保つこと、予防接種及び検診を受けさせることで公衆衛生上の危害を生じさせないように努めることなどが定められている。補助犬は使用者が指示したときに指示した場所でしか排泄しないように、また、飲食店では使用者の食事が終わるまでテーブルの下で待機するなど、使用者の管理のもとで待機するように訓練されている。身体障害者は補助犬の日常の管理として、毎日のブラッシングや定期的なシャンプーなどの手入れを行うことになっている。

医療機関は補助犬法で同伴受け入れが義務づけられている施設であり、身体に何らかの障害を持つ補助犬使用者も補助犬と共に利用する。医療機関側は補助犬使用者に対して求められる医療を提供するために、補助犬を円滑に受け入れることが必要である。実際の補助犬の受け入れ方については特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー¹⁾や、2013年に厚生労働省が医療機関向けに作成した補助犬受け入れマニュアル²⁾に詳しく記載されている。このマニュアルでは、「補助犬を受け入れるための体制づくり」、「受け入れ範囲や方法」、「補助犬使用者への対応」などについてまとめられている。しかし、実際は医療機関でのマニュアルの認知度は低く³⁾、補助犬同伴での受け入れが拒否されるという事例が報告されている⁴⁾。また、医療機関における補助犬受け入れ状況の調査では、補助犬についての知識不足、特に衛生面での懸念から、補助犬来院に不安を感じている医療従事者が多いと報告されている^{3,5)}。医療従事者の中でも看護師は、患者と接する機会が多く、

障害者が補助犬を同伴して来院した際に対応する可能性も高い。そのため看護師が補助犬についての知識を持ち、受け入れに積極的になれば、医療機関での補助犬の受け入れは進むと考える。そこで今回の調査では、補助犬使用者の医療施設での受け入れを促進するためには看護学生に対してどのような情報が必要なのかを検討した。看護学生を対象に補助犬の認知度調査を行い、さらに同様の調査を相対的に動物に関心があると考えられる動物看護を学ぶ学生に対しても行った。また、動物看護学生を補助犬についての講義がある大学生と講義がない専門学生に分け、学校教育の中での講義の有効性についても検討した。

II. 方法

2013年10月から12月に、動物看護を学ぶ日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科（以下、VN大学）の3年生88名、4年生19名の計107名と、シモゾノ学園国際動物専門学校動物看護・理学療法学科の2年生41名と3年生25名、動物看護・栄養学科の2年生33名（以下、VN専門）の計99名、人の看護を学ぶ（以下、人看護）聖路加看護大学の3年生5名、4年生3名、杏林大学看護学科の4年生1名、日本保健医療大学の3年生20名、茨城キリスト教大学看護学科の4年生3名、順天堂大学保健看護学部の4年生1名、宮城大学看護学部の4年生1名、茨城県立医療大学看護学科の4年生1名、活水女子大学看護学部の4年生10名、久留米大学看護学科の4年生3名、九州大学保健学科看護学専攻の4年生15名、日本赤十字九州国際看護大学の4年生1名、聖マリアンナ医科大学看護専門学校の3年生15名、杏林大学医学部附属看護専門学校の3年生24名、鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校の3年生1名の計104名の合計310名に質問紙を用いた調査を行った。また、VN大学とVN専門の学生を合わせて、動物看護学生（以下、VN学生）とする。配布方法は、直接手渡し、メール、郵送により行い、アンケートの回答方法は選択式と記述式によるものとした。

質問内容は補助犬の認知、補助犬法の認知、補助犬の同伴可能区域について、補助犬について知りたいことの質問項目から構成された。具体的な質問内容は表1に示した。統計処理方法は、t検定と χ^2 検定をPASW statistics18を使用して行った。

表1：アンケート質問項目一覧

1. 「身体障害者補助犬」という犬を知っていますか？
 1-1. 補助犬に該当すると思うものはどれですか？
 選択肢：盲導犬、介助犬、聴導犬、警察犬、セラピー犬、災害救助犬

2. 「身体障害者補助犬法」という法律を知っていますか？

3. 補助犬が同伴できるところをすべて選んでください。
 選択肢：飲食店(チェーン店・個人経営店)、総合病院、個人病院、スーパーマーケット、コンビニエンスストア、デパート、電車、バス、タクシー

4. 病院内で補助犬が同伴できるところをすべて選んでください。
 選択肢：待合室、診察室、透析室、一般病棟、集中治療室、エレベーター

5. 身体障害者補助犬について知りたい事は何ですか？
 選択肢：排泄管理、トレーニングの方法、衛生管理(お手入れなど)、外出する際の補助犬の準備、特になし

III. 結果

回収率は83.9%であった。そのうち質問紙の2分の1以上記入されていないものは全て無効回答とし、有効回答率は95.8%であった。補助犬について「知っている」のは人看護93.9%、VN学生(全体)98.0%、VN大学98.1%、VN専門97.8%であった(図1)。「知っている」と答えた人に対して補助犬の種類を尋ねたところ(複数回答可)、「盲導犬」は人看護、VN大学、VN専門すべてで100%、「介助犬」は人看護82.8%、VN学生98.9%、VN大学100%、VN専門95.7%、「聴導犬」は人看護77.4%、VN学生98.4%、VN大学98.0%、VN専門96.8%、「警察犬」は人看護36.6%、VN学生10.8%、VN大学3.9%、VN専門18.3%、「セラピー犬」は人看護29.0%、VN学生22.1%、VN大学12.6%、VN専門32.3%、「災害救助犬」は人看護28.0%、VN学生10.8%、VN大学5.8%、VN専門16.1%であった。VN学生の介助犬と聴導犬の認知度は人看護学生より高かった($p < 0.01$) (図2)。補助犬法について「名前・内容ともに知っている」は人看護3.1%、VN学生31.4%、VN大学50.5%、VN専門8.6%、「名前だけ知っている」は人看護23.2%、VN学生38.1%、VN大学41.9%、VN専門32.3%、「名前も内容も知らない」は人看護73.7%、VN学生32.4%、VN大学7.6%、VN専門59.1%であり、VN専門と比較してVN大学で明らかに名前・内容ともに知っ

図1：VN大学・VN専門・人看護学生における補助犬の認知度

図2：VN大学・VN専門・人看護学生における、補助犬の種類別認知度

図3：VN大学・VN専門・人看護学生における、補助犬法の認知度

ている人が多かった ($p < 0.01$) (図3)。補助犬の同伴可能施設について(複数回答可)は、「電車」は人看護85.9%、VN学生93.9%、VN大学99.0%、VN専門88.2%、「バス」は人看護79.8%、VN学生90.9%、VN大学97.1%、VN専門83.9%、「タクシー」は人看護51.5%、VN学生69.1%、VN大学81.9%、VN専門54.8%、「デパート」は人看護70.7%、VN学生83.3%、VN大学89.5%、VN専門76.3%、「スーパーマーケット」は人看護51.5%、VN学生75.7%、VN大学76.4%、VN専門74.2%、

「総合病院」は人看護71.7%、VN 学生85.3%、VN 大学88.6%、VN 専門81.7%、「個人病院」は人看護43.4%、VN 学生52.5%、VN 大学50.5%、VN 専門54.8%であった。すべての学生においてタクシーの選択率はバスと比べて低かった ($p < 0.01$) (図4)。同様にすべての学生において個人病院の選択率は総合病院と比べ、明らかに低かった ($p < 0.01$) (図4)。病院内での補助犬同伴可能区域について(複数回答可)は、「待合室」は人看護87.9%、VN 学生97.4%、VN 大学98.1%、VN 専門96.8%、「エレベーター」は人看護64.6%、VN 学生79.2%、VN 大学80.0%、VN 専門78.5%、「診察室」は人看護45.5%、VN 学生77.7%、VN 大学74.3%、VN 専門81.7%、「一般病棟」は人看護20.2%、VN 学生45.9%、VN 大学45.7%、VN 専門46.2%、「透析室」は人看護14.1%、VN 学生23.7%、VN 大学32.4%、VN 専門14.0%、「集中治療室」は人看護7.1%、VN 学生5.0%、VN 大学3.8%、VN 専門6.5%であった。診察室と一般病棟において人看護学生は補助犬が同伴可能だと思う人が少なかった ($p < 0.01$) (図5)。補助犬について知りたい事について(複数回答可)は、「どのようなトレーニングを受けているのか」は人看護65.7%、VN 学生60.1%、VN 大学64.8%、VN 専門54.8%、「どのような衛生管理(お手入れなど)をしているのか」は人看護42.4%、VN 学生38.3%、VN 大学36.2%、VN 専門40.9%、「補助犬使用者が外出する際の補助犬のための準備」は人看護34.3%、VN 学生34.3%、VN 大学28.6%、VN 専門40.9%、「どのように排泄の管理をしているか」は人看護32.3%、VN 学生20.2%、VN 大学11.4%、VN 専門30.1%、「特になし」は人看護9.1%、VN 学生9.0%、VN 大学8.6%、VN 専門10.8%、であった(図6)。「その他」を選択した人からは、『独居在宅療養者と暮らす補助犬の緊急時の対策』、『何ができて何ができないのか』、『病院で起こりうる感染リスク』、『補助犬のメディカルチェック』、『補助犬の1日の生活』、『ストレスは無いのか』、『引退後の生活』、『補助犬の問題点とそれに対する活動』などの回答が得られた。すべての学生において補助犬のトレーニングと比べ衛生管理・排泄管理への興味は低かった ($p < 0.01$) (図6)。

図4：VN 大学・VN 専門・人看護学生における、補助犬が同伴可能だと思う施設

図5：VN 大学・VN 専門・人看護学生における、病院内で補助犬が同伴可能だと思う区域

図6：VN 大学・VN 専門・人看護学生における、補助犬について知りたいこと

IV. 考察

今回の調査ではどの結果においても、VN 学生の補助犬認知度は人看護学生よりも高かったことから、動物看護を学ぶことは補助犬を知るきっかけになると考えられた。しかし、VN 学生を、大学生・専門学生に分けて比較してみると、VN 専門学生は補助犬でない多くの働く犬を補助犬と考えていたり、補助犬法自体を知らない人が多いなど詳しいこ

とは理解していないことが示された。今回アンケートを行った動物看護大学では補助犬に関する講義があり、専門学校、人看護学校では講義はなかった。このことから、学校教育の中の講義といった体系的な情報提供は補助犬についての認知度の向上に影響すると考えられた。同伴可能な施設については人看護学生・VN学生でタクシーと個人病院の選択率が低かった。このことから、補助犬法で同伴が認められている公共交通機関や不特定多数が利用する施設の定義が理解されず、「狭い」「個人」という主観によりタクシーや個人病院は「同伴できない」と考えていると思われた。VN大学生では、補助犬法を知っている人が多いにもかかわらず、やはり総合病院と比較して個人病院の選択率は低かった。なお、今回主要な多数の診療科を持つ病院を総合病院、個人で経営する診療科が一つもしくは少ない小規模の病院を個人病院と想定して質問を行ったが、1996年の医療法改正により総合病院の規定がなくなったことから特に人医療を学ぶ看護学生に対しては混乱を招いてしまったかもしれない。

また、病院内の同伴可能区域については、人看護学生において診察室と一般病棟の選択率が低かった。この理由として人看護学生は、犬を医療行為を行う部屋に入れることへの不安感が強いのではないかと考えられた。今後、補助犬の同伴を理解してもらうためには、公共交通機関や不特定多数が利用する施設についての定義等をより啓発する必要があると思われる。また、人看護学生、VN学生ともに、補助犬のトレーニング以外の衛生管理や排泄管理などへの興味が低いことが示された。そこでまず補助犬への関心を高めるような教育が、そして、特に衛生面についての詳しい情報提供が必要であり、今後積極的に実施すべきであると考えられた。

における補助犬受け入れ状況：3年間での変化と地域差の検討。日本補助犬科学研究, 6(1), 41-48.

- 4) 介助犬使用者の会 同伴拒否調査 (2013) 第5回兵庫補助犬研究会 プログラム・抄録集
- 5) 三浦靖史、岡田奈々、近澤知乃・他 (2003) 医療機関における補助犬受け入れの現状と課題。日本補助犬科学研究, 4(1), 31-37
- 6) 日本盲導犬協会 (2003) 平成16年身体障害者補助犬法に関する実態・意識調査結果 身体障害者補助犬法の現状と課題—改正に向けた研究と提案—, 83-91.

V. 文献

- 1) 特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー (2004) 医療機関における補助犬同伴受け入れマニュアル作成委員会編 身体障害者補助犬同伴受け入れマニュアル〈医療機関編〉
- 2) 厚生労働省ホームページ (2013) 厚生労働省身体障害者補助犬ユーザーの受け入れを円滑にするために～医療機関に考慮していただきたいこと～<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/hojyoken/html/a08.html>
- 3) 三浦靖史、大中萌、石川智昭 (2012) 医療機関